

私の保育

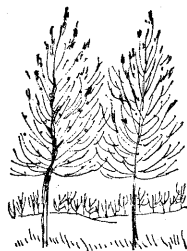
中島佐知子

六月のある土曜日のことです。子どもたちは、降園の身仕度も一人で行けるようになり、それぞれが、カバンや帽子や、いつも土曜日に持ちかえる手拭用タオル、コップ、それにうわぐつなどを、母親お手製の手さげ袋にしまい入れ、床につけられたビニールテープの目印の位置に、送迎のコース別に並んでいました。そのうちに、手早に並んだ子どもたちの間から、「とんとんまーえー」のかけ声が起こり、ゆっくり型の子どもをあわてさせながら、次第に四列となって、上手に並んでいきました。

その時、「おやっ」と一瞬耳を疑いました。騒々しいか

け声の中から、ひときわ高く、発音のおかしな「トントンマーエイ」という声を聞いたのです。私が、思わず声の方を振り向いた時、「せんせーい、Kちゃんがっ」「Kちゃんが、にほんごをはなしたよっ」子どもたちも、口々に驚きの叫び声をあげたのです。

Kは、子どもたちの視線の中で、身動きもせず立っていましたが、その笑顔は、こぼれそうな程のよろこびに輝いて見えました。私は「良かったね」と、胸の高鳴りを押えながらKの頭を撫でたのです。南米チリーから来て、最近、ようやく周囲の子どもたちとも遊べるようになったK



の、はじめての日本語は、何と「とんとんまーえ」でした。

Kは、四月に二年保育の年少児として、入園しましたが、生活様式も環境もまるで違うし、言葉もわからない為、園生活にも馴染めませんでした。六月に入ってから、ようやく担任の私の傍を離れて遊べるようになりましたが、Kが、次第に安定していくまでに、子どもたちは、常に援助の手を差しのべてやり、まるでKの兄や姉であるかのように、優しくいたわっておりました。

園内では、毎年海外に転出する子どもが何名かおられますが、他にも、海外で生まれた者、海外生活経験のある者も随分おられますので、あるいは、そうした経験や父兄の姿勢などが、末っ子で我がままなKを、外国人扱いすることなく、暖かく受け入れることができた一つの理由ではないでしょうか。

もう一つは、園側の掲げる「子ども観」「保育観」が保育生活に滲透して、子どもたちの自主性、主体性を徐々に伸ばしているのではないかと考えます。

筑波研究学園都市の計画に伴い、私どもの幼稚園が設立されて、四年目に入りますが、当初二十七名だった園児数も、今年から二年保育になったせいもあって、百八十名と、大所帯になってきました。私ども職員は、本年度の努力事項として、

- 1、子どもに即する教育
- 2、自主性、主体性を育てる教育
- 3、創造性を育てる教育

の三つを掲げて、スタートしましたが、今年就任された若手の女子園長の指導に基づき、これまでごく当り前のように成されてきた幼稚園での保育内容、方法、計画が、本當に右記の努力事項を達成し得るものかどうか、一つ一つ検討しながら、子どもの生活形態をより良いものへと変えていこうとするものです。

これらの吟味、検討、改善については、通常月曜日の全体会、金曜日の学年会などで討論が重ねられます。時々、意見が分かれ、個々の意見を述べ合いながら、七名の職員

が頭を抱えることもあります。新採用の職員も経験のある職員も、真にどういふ子どもを望ましいと思うか（子ども観）、どういふ保育が良い保育なのか（保育観）を考えない訳にはいきません。

私など、子どもたちと遊びながら、よろこび合いながら、見出すことがあり、いつの間にか、保育観までが変わっていることに気づくこともあります。保育の深さ、むずかしさは、底なし沼のようにも思われ、悩みや反省も年々増していくようです。

これまでの保育者としての生活を振り返る時、未熟な自分がひどく遠まわりをしながら、汗だくになって歩いてきたようにも思えるのです。学校を出たての頃の、意欲に燃えた自分の、体当りの保育は、とかく自分本位で、子どもたちを引っぱりまわしていたのではなかっただろうか。また三年、四年と経験するうちに、保育全てをわかったように思い込み、子どもたちの活動に何かと教育的位置づけをしたがり、保育を技術的に考えたり、先輩の保育指導が大変気になったり……。当時の私には、望ましい保育のあり方について考えたり、自分の保育に疑いを持つゆとりもないうままに、無我夢中で進んでいたのではなかっただろうか。

か。

そして、結婚、出産。現在三歳になる娘と、一歳の誕生日を迎えて間もない息子の母となった自分の中に、ようやく保育者としての芽生えを感じるこの頃です。職業という意識の枠を越えて、子どもたち一人一人の発育を案じたり、父兄の気持も理解してあげたいと思えるようになりました。むずかしいが故に、よろこびもまた大きい保育の世界は、本当に素晴らしい世界ではないでしょうか。

○

それでは具体的に、どのような保育形態が一人一人の子どもに即した教育、自主性、主体性を育てる教育を達成し得るのでしょうか。

朝、いつものように期待に弾ませて登園した子どもたちは、所持品の始末やうがい、おたより帳のシールはりなど、朝の習慣活動を自主的に済ませた後、それぞれに、自分の好きな遊びを見つけて取り組んでいきます。それら自由あそびも、子どもたちが見つけ易いように、たくさん場の設定を用意しておく事が必要に思います。

教師は、消極的な子ども、遊びに入れない子どもを、いかにして遊びの世界に誘い入れるかといういろいろ試みながら、友だちとなって、あちらこちらの遊びの仲間に加わり、一人一人の発想や、要求を、できるだけ可能なものにしてやる為に、目立たぬ程度に必要な応じた助言や手助けを与えながら、子どもが遊びに熱中できるような状態にもっていく事が大切でしょう。しかし、あそびによつては、発展させていけるだけの豊富な材料を用意しておかなければならないと思うのです。せっかくの発想も、材料のとり合いや、確保に追われていたのでは、じつくりと遊ぶこともできません。

それと、もう一つ大切な事は、常に、たっぷりと余裕のある時間ではないでしょうか。これまで、私自身経験してきた保育形態ですが、自由あそびの後、一定の時間にレコードや、チャイムの合図があり、それまでの遊びの片づけが、半ば強制的に行われて、一斉指導が展開されるのです。

もし、子どもたちそれぞれについての遊びが、一区切りついた時点での合図であれば、片づけ作業にもきつと精が出ると思います。しかし、まだ熱心に遊んでいる最中、合

図をきいて「つまらないなあ」という言葉が、子どもの口をついて出たとしたら……。保育者として、子どもたちに「つまらない」と言われる位、悲しい事はないと思いません。しかも、子どもたちの中には、自由あそびを「あそびじかん」、一斉のあそびを「おべんきょうのじかん」だと考える者がおり、それを聞いた時、胸が痛くなる思いをしました。

このような保育形態からですと、たとえわずかなことでも、一つの遊びの完成や、そこから生まれるゆとり、自信へのつながり、そして子ども自身の成長へのよろこびを、どの程度まで味わわせることができるのだろうか、疑問や改善の策を抱かすにはいられないのです。

個人差の激しい子どもたちですから、自分から遊びを見つけて、熱中できるまでに要する時間にも著しい個人差があるものです。いきなり、あそびをストップされたために子ども自身で見つけようとした何かを、見つけられずに終るばかりか、物に熱中できなくなったり、物を乱暴に扱うようになったら、それこそ大変です。

子どもたち一人一人に、わずかな充実感でも良い、それを味わわせてあげたい。その為には、余裕のある、たっぷり

りの時間を用意しなくてはならないと思うのです。

こまぎれでない、ゆとりのある許容的保育形態の中で、毎日を思い思いに遊びながら、連がりのある展開をみせる子どもたちの姿は、どこか伸び伸びと育っているように思われます。その上、毎年のように問題になっていた、いわゆる「はみだしっ子」の存在が、今年感じられないのもうれしいことです。

○

現在、私の持つ級では、去る七月から転入した女兒（インドネシヤ人）と、九月にもフランス人の女兒を加えて三十三名、言葉や習慣の違いに悩む様子も見せずに、元氣よく登園しています。村立の給食センターから届けられる昼食、その昼食までのたっぷりぶの時間を、砂場や園庭や保育室一杯に散らばって、室内など足の踏み場もない位の繰り広げようですが、熱心に遊び込んでいます。

子どもたちの遊びをみると、いろいろな遊びの設定の必要なことが良くわかります。例えば、ままごとコーナーで、はじめ家族づくり熱中した男女女兒が、買物に出か

けていって、別のコーナーで画用紙に描いたり、切ったりして、様々な物をつくって戻ってきます。そしてそれらで一時を遊んだ後、テレビを見ましょようと、積木を運んできて組み立てて、あれこれ会話しながら遊ぶ。

中には、ひごを何本かテープでつないで、先端よりピニールひもを下げ、画用紙でつくった魚をつけて戻る家族がくると、次々に魚つりが始まり、一つの遊びは、数々のあそびを繰り入れて遊ぶ程に楽しさも増し、飽くことを知りません。私自身、たのしくてたまらないことがあります。

「あっセンターの車がきた」誰かの声で、あそびは次第に片づけへと変わっていきます。十分に熱中できた時は、片づけも上手にできるようです。

降園前のひととき、季節のうたや小さな物語や時に反省会をひらきます。また、明日の遊びについて話し合い、明日に期待をもって帰っていく子どもたちの為に、放課後の広い保育室で、一人思案する私です。

（桜村立竹園東幼稚園）